



大内
興立
十杉傳
第三輯
卷二

花
202
7

13
202
7



仙流家中柳太夫太夫持扇
 一手持扇
 花は

興隆 十杉傳卷之十二

第廿三回 舊好老僕會旅泊



昔公左辻して曉の月と詠ゆ。行平頂磨ふ流き且も。岩根の松も言さる。岩根
 杉谷長門の此に野も過るる。狂寛不命を把らるる。伴作は佐らるる。狂
 のさるる。武士杉坂藏人が脅力に。追慕を難人を。切ま。た一條の
 血路と用き。信濃坂の樹林ふか。三箇さ。美と信の長居。さるる。あ
 ち。路と。ま。ま。當難を。の。長門八。寸。何
 と。獨行の。と。物。人。と。細小。行。と
 赤。包。と。俱。不。脊。負。旅。商。人。不。打。扮。て。彼。方。此。方。と。呻。吟。の。い。ろ。も。せ。し。
 一先ハ花洛の方へ至らん。と。必。定。めて。途。行。ね。且。と。狂。寛。平。の。い。ろ。あ。ら。彼。程。各



一先ハ花洛の方へ至らん

あく知縣の人夫と逐散したる罪もあり。東海道へ便宜悪く。木曾路へかりある
 のこと田舎文の国へさへかり。上列妙美の林麓へさう頃、夕月半中へ梢のうら葉
 風態で頂近く鳴きさる。杜鵑の妻さる。冥土の鳥と安らるに吾身のとと啣く。
 仰向するまの叢雲の。柳引山や西の空折れも楓と降来る。郊の花降しふ霎時が
 るを。駢まひ此方の茅屋の軒へさる年さ可二八いとる年あける處女をとりぬ。
 妾門ハ腰と屈めり。是ハ旅さる商人の中。此河へ通り付るが。暴の雨は詮方る。軒
 端は惶おとさるる。霎時がわらむと爰借て甜なせぬといひるを。處女ハさる
 らちちの安ん寝の命に付り。此方へいりて休む。使徒催子ハ泣茶さへ佛て
 むるふるふ一飲私と折敷ふのせと。茶と妾門ハ謝して飲終り。夕花月ハ
 日和さ定ぬあらととを咬るれど今朝までハ空をさる。山の楊もよく又渡り。

ふ暴ふらるむら雲に。とるるをさで降雨ハ旅行人ハ苦をせよとさる。是より
 曇ハ山間の路険しきと。夕月半中へ歩行むいと便ありといひつ。腰をさるるけり。
 表の方と記めてさう。かろ野ハ奥の方へ。掌磯をりち鳴きと音と。夕月半中へ彼處女ハ
 赤と回答て狂往ぬ。妾門ハ独はさる。と降る雨とさう詠め。さや夕暮ハ程ちり。
 雨の止むとさる。とさる。何方へせよ。病をん。列里ぬ山路ハ往く。とさる。詮方
 へ。とさる。此家とさる。片隅ハ横ハ蒲團とさる。行燈ハ四ツさる。
 あり。家の造りも我同あり。襦をのて蒲とさる。旅籠屋にこそある。さる。それ
 るら下女婢女も。我居るさる。左ハさる。處女の外に人もさる。さる。病りと
 時とさる。とさる。彼方より。處女ハ其處へ来り。妾門ハむらひて。さる。さる。
 下り何方と志さる。往るさる。雨も頻りて降る。さる。日さる。暮ハ近。

妾が家ハ遂行人不宿りとさき世と愛と命親在そりし貝人並に奴婢も
あり優ふくらし侍りしが三年以前は辞せり。年来仕する豆助て不老方下僕と
妾と兩個臨不殘さく幽ふも世と命親を侍る。今宵の宿り何方とさき
あられあるら。此家に宿りあらんと。いそきて此方ハ侍る不舟暗夜の月とら
歡びいそぎどく此方ゆも宿りと何方と定めら。さふもあらわがそ侍律今宵
止ちくさるると。回答て頭く草鞋の紐いそぐ足はさ。さといひは
鹽の温湯其処におたさる行李祓處女ハ一回へ運ぶ。身も臨ふさくもて
其処ある一回へ座と定めら。今日の勞を休む不程をりてさる夕餉の膳食更
も果て祓けり。路ゆくさる古本の漢書と披きて情見ありに沛公頂羽ふ
敵て七十余度の國戦した。一回も勝びさる不鳥羽の戦ひ不大利とひく。

勿心地海内其処に属し。富貴と極め四海不名とあげ。高祖と仰がさる。偏
に時運のさるべきと。假令とさるも救あらぬ此及びねとさる。吾聊の志願と
護し。故々とさる其日より。今日の夕に至るまで。片時も安座せ加之柱
竟不禦御の耻とらる。夏薄命ある不似とさる。危き時不憶佐る者の
いそまも。皇天のまご捨あらぬ。のあやあらん。始のさるに。かく
零落とさる。これ何ま又便。何まの人と情を。人れ術もさる。花落へ登り誓
にたふ。若杉板等にぬりある時。ありとも。此空飛命撃げら。のさる。仕の。なる
喜もる。ま。下。に。面。目。る。た。所。為。る。り。花。落。登。り。ハ。あ。ら。後。く。信。濃。の。国。あ。る。浦。上。家
あ。少。の。由。縁。あ。る。の。と。と。便。て。隨。心。く。さ。る。後。に。環。り。あ。ら。う。や。約。さ。背
く。も。耻。輝。さ。不。増。ら。う。と。さ。バ。い。降。雨。の。胸。不。応。て。その。ま。に。枕。さ。た。し。せ

燈火の下にゆらゆらとそよそよと襖一重と隔る。此方の一面は曇り、旅人とて
旅燈の傍に對面し、うらやまの地を嗟々と叫び、胸に苦しみ、其の苦しみは襖の
より、襖の六年のむと六十餘の老人にて、暴う病ひとて、是は又門の其処は走り
より、是も喃旅人といふせし。此程寒暖不同、あまは持病の積の幾、うう生憎み
く、野への葉もさすもきらく、此処は宿の處女は何方ぞ、旅人が急の病ひを
おふ、其のあまのく、本てよと喚声、さく此方より。一個の侍、徳と刀と提ぐ野
袴、野羽織着、襖とあり、此老人が急病とや、吾も旅行のあつが、此程より
し、持病を犯さ、是の旅はよ二四日、返つて、病養へ、さや伏る、ねむ、巴、聖と
斐足、さく、と、あ、僥倖、己、さ、飲、餘、さ、さ、動、湯、あり、と、昔、え、よ、と、懇、る、詞、ふ
及門ハ額着て、某、さ、も、此、旅、人、よ、知、音、由、縁、も、る、た、老、る、れ、ど、先、より、昔、痛、と

さるふ忍び、さく、お抱せ、さく、ハ、あ、さ、も、其、の、准、備、あ、な、小、困、り、て、宿、の、處、女、と、喚
起、せ、し、に、和、殿、が、用、ひ、の、く、良、劑、さ、く、賜、ら、る、ハ、此、病、が、幸、な、侍、り、と、面、答、つ、頓、て
兼、と、勤、む、は、遊、び、あり、て、漸、く、み、七、八、分、ハ、息、を、俯、した、り、自、と、握、り、何、方、の
人、に、在、り、さ、く、あ、ら、れ、ど、か、る、難、美、と、優、く、も、救、ひ、の、る、辱、る、さ、和、君、が、さ、く、ハ、今、此、處
で、病、を、塞、ら、し、死、て、ん、の、の、さ、く、は、飯、魂、の、思、ひ、侍、り、と、い、ひ、め、く、自、と、さ、く、胸、り、此、方、も
さ、く、と、自、ら、ら、馳、め、其、方、ハ、先、頃、程、さ、谷、で、連、累、せ、ら、し、て、茂、平、ハ、あ、ら、ま、や、夫
より、後、ハ、あ、ら、ま、く、み、く、尋、ね、訪、げ、侍、り、も、さ、く、目、に、お、れ、他、を、父、子、が、良、と、さ、く、さ、く、
障、ハ、あ、ら、ま、り、と、さ、く、と、さ、く、さ、く、其、の、處、に、い、よ、と、ほ、く、さ、く、宣、ふ、ハ、及、門、主、ら、さ、く、さ、く、さ、く、
番、り、き、お、れ、景、勢、ハ、珍、重、と、さ、く、さ、く、さ、く、大、難、も、過、世、の、罪、と、他、で、他、と、悔、み、さ、く、
命、の、際、ハ、至、る、と、佐、ら、ま、り、其、昔、大、恩、う、け、る、己、と、さ、く、主、人、杉、倉、左、京、の、日、九、

稚き時より吾家よむた育あびる年月の恵とあひく其此と捨てしむく父とつ
徳徳の恥位けらまへハ姉くもまこ立ばつらまき若子ぐう左なる右なるあひ
うち土地の悪見坐九郎が女見小雪と被さぬ。そは遣くいと逐逐ても六十
ふゆる弱腕あまは終る渠等にもち居らば必ひ早とと此ハ協つと悔い候も
出たこそ此処で死でと必ひか死ハ易くして生ハ難しと覚る喜もいれどふ。下ま
此場とえささる。後まこ律と量るまは稚子や女見小雪とあひてもあつと氣
とる直く。逆も家へ歸らば少の家財何せん。そまより河々と遍歴して
西個が往方と索ねても縁の尽る今にあらむ日々替同して病とをり。今日ハ
殊さらし烈々く護して人事とまも受ぬまで苦まをりして和歌の百首集厚け
るを謝らるる。妾門ハ情をいと交左もあつらるる是もまこあひ設けぬ真から

吾血と最小痛りあり。縁故ゆく家と捨父子互に散乱し互に胸と苦
しむ。是もまこ己まこ河をよ似たり。むせりのみ抱と謝しあひの面目あり。さるる
杉倉伴作ハ其方が故主の子ふあり。吾彼難河と道さりて伴作まこ
兄弟の美と信びくま退り。あまは其方と吾まこ中も聊知音あま似るま
今より其方と同伴し。花洛あま杉倉小見あま喜もあるべきあり。園と遭
し物怪の僥倖型より道と俱中く。女見市小雪が往方とも俱々探しヤ
さんよ心弱くるまはまこと赤心ある妾門が詞茂平ハおもちら然ハ稚子の
美兄と兼るまはまこ和殿も即稚子よあま。聊辣畧よあま命のてく
先傷く。花洛入まはんと夫より兩個ハ路々の患難辛苦と語あまい
短き夏夜の夜の曉近く一睡の夢あまの朝日影夜の向ふ空の晴くも



幸ひ。いざ頭と促して。朝餉とあまひまゝの折ら彼処の一回ふわたの
侍。昨夜の惠を一言謝してと敷居の外跪つ伺ふ。彼方も今朝ハ葦足
と。四人ある従者ぞが。行李と運ぶ脚絆と草鞋と汗せたまで混雑と
参門ハ是れぞ序悪う。昨夜並さる謝すまを。律ふ紛れど時刺後
臥するさるふ然らば望ふと伸あきくハ此方の等閑今混雑の町へ
礼といへも心あ。目もまも長たな滑く待く。彼侍が此処へ出るバ詞の礼と
いへんののと待向むごうその準備整ひなバ従者ぞハ。まゝ旅店の店
先ハ跪まりてぞあぐる。彼侍ハ徐々と奥の一間とまきりに参門茂平の両個
ハ駈いで床と惠く礼とのべ少く控へてあがる所ハ此家の處女ハ先ねど
彼下僕るる豆助と両個厨屋ハ立駈ぎ。朝餉の椀皿とりあがり。居るうが

遽く。駈来り侍の袖と控へる小声あがり。なや葦足とるるあう
さらば妾が爺親より。先頃和君ハ貸まわらせ。黄金と返り起行
あ。いそぎく勿心地眉と頻り。要時處女が自ら守り。此街道と通るま
三千と起る今が始。従来ハ歴櫃棧もろく自らあらしむるさるるわらわら
親よのりるが黄金と借べき所謂ま。狂瓦まけらる左もろくハ人違ふ
こそあら。頭と放せと袖ふりきり。往んとまると處女ハ杖も杖とまら
引とらへらるる夜と宣ふる父ハ果敢あく世とまて。今盤は遺せし言の
葉ハ今我耳の底に作り。かろ卑した血とめく。いそぎも尊れた和君ハ向ふ
偽言よ。いそぎく此廣き家。老る下僕と両個と住ハ嬾く住
和君が清来ると指と屈りく今日の日と待豫らる甲斐ありく見え

らまら亡父の形見は残さず黄金とひき時や来りると誓ひし小妻と女子
 と侮らるる。学入るる情も。父が平生を鄙言ありて言く言はれり
 口よひて安否と訪むも其容を以て曉とてや。この人にては會くその妻と
 不徳とおもさるる。返りて只信よ。いひくは且て侍はまじく討り
 貞さめく鬼神の回答も有り。君門茂平も是を愛すもひきとて
 と又き。そま不果ると待む。彼侍が従者等ハ皆て草鞋のまゝ踊
 り。處女と合破と蹴久しく。尾は垂るる其処除む。是も亦のせぬ
 人。金と借べき所謂あり。察する小貯あり且那と語りて金と奪ひ
 便とるまえ計較り。適莫えけり。似ね斯大膽なる女めい。後來の元
 せしめ断る三段ある。是れと既し刀へん。とけり。鯉口耳げとひかる。

君門茂平も差やとむ。て。冷ある行と握り。處女と不便と。心
 裡とむらさ。生中。とととと。悪巧の連思。小せ。言もあ。と
 思。バ。ば。身と頻り。言と。居り。り。處女。其。処へ。物。除。ら。と。赫。と
 せ。ら。ら。自。の。血。が。洞。洞。髪。を。震。り。と。左。を。伸。し。喃。情。あ。い。笑
 け。り。と。て。黄金の。欲。く。も。跡。形。も。る。た。偽。と。真。面。よ。る。と。言。さ。る。べ。た
 父。と。母。と。小。別。れ。と。ら。二。年。以。来。片。時。も。易。き。心。も。る。だ。と。漕。船。の。小
 舟。小。あ。ら。わ。れ。ず。浪。は。漂。ぶ。身。の。往。ま。る。何。方。の。浦。や。住。ま。と。定。め。豫
 け。る。憂。月。日。も。一。言。も。虚。言。と。言。く。度。の。ま。ら。ね。と。言。く。和。君。の
 信。神。の。従。者。ま。も。俱。く。入。の。妾。の。つ。る。悪。念。あ。り。ま。か。む。を。う。り。た。れ
 根。を。一。言。の。く。罪。と。や。蒙。る。べ。き。救。う。れ。身。も。全。ふ。て。親。の。仕。お。ま。し

此世帯たゞ細くも竈の烟も。さうただか此の愿ひめて父の貸ら黄
 金と責る。命あつて何うせん許させ入左程まで惜みあつるのあらば
 黄金ハいらし。嗟怖しやと逃るとやらと裾ふきあめ服と睨まき言はれく
 ず。處女今ふるり。金ハいらしといふも。汝が首の絡るべき盗とあつて
 律頭いさう。其品と返さずも賊の汚名と雪ぶようさ。夫ふおぼさき
 汝が心根。覚る死と言ふめて。あつて金と奪りん若律ゆさる金ハ入
 いと。いさう此場と通えんと。あつて争で許さるべき。所の知縣へ引めて
 ぬたぐも。善悪邪正と糾さす。あつていひて責さるる。あつて許てくと
 妾門が後へ駈まむと従者いさう奮撃して踊りかゝる威勢よ妾門が
 肩と丁と蹴る。其足緊と引さる片膝まき曳声あつて。遙此方へ戻ると

打せ眼と睨まき。妾門ハ敦圍汝をらさや細小ある。虫ふも此の魂あり
 某賤しき此るりといさう天地の神と同体る。人よ向ひて後忘至極
 此家の處女。答ありと責むる足下が随意と。某いさうあつて刃
 さると奮怒の氣よ乗。肩と蹴らる何古ぞ。う。両刀ハ佩るとも。
 かるぶの不礼許さ。と白眼つめ。バ彼漢子ハ嗟小賢まき素町人
 嗚呼がま。いさう武士よ向つて。罰不礼ハ此方も許さ。さらば此家の
 處女と同腹。吾主従と辱しめん計較ありやと言も果と合破と起て
 まま飛かると。先刺よりいさうと又き始終と。女居る主人の侍も早く
 渠とおく住め。慮外るせを静まりと。且も暴より逸々容子とあつて此
 家の處女。吾よ對して全く麻忽の謂よあつて。彼弱官が体とるに

是尋常の商人あらむと汝と投する子徳のちよる吾も及ぶぬ
中の働きて於感する子餘りありと。おつ隔るま門に向ひ下僕が不
礼ハ用捨あま足下は同べた度あり。此方へよりわと懇懇する詞ふ
ま門も容形と改り。膝より寄る對居たり

第廿四回 杉戸神易駭衆人

當下件の侍ハま門に向ひく言るを。そむく足下ハ元よりの商人ふ
てはあべうと何さる由故ある人と云る。いつちまは斯理の且と興
容形とるあま今の子徳の程といひ其容貌の逞き天晴一個
の健士あり。苦くならむ其素生と包まぬ語つて笑うて。斯言と某ハ
信濃の国なる浦上家ハ叔代仕する武士も杉戸の十郎といふ者あり。

先年少の過あり。當家と逆放せらるるより。所々遠国ハ流浪せ
しが。是に居る家隸等ハ。是思顧譜代の考めて。吾ハ別とて成
忍びも。流浪の他と厭る。属従ひくはる。吾ハ一個の叔父あり。
信濃国木嶋平ハ郷士とあり。世と思われ其家豊ハ送る。這回
彼処ハ立越して路用と借づく。此所まで来り。肩ふる
あらねども。某聊武邊と嗜む。諸国の武士等ハ因おきぬ。是色バ
足下も窶々ハ。吾と俱々木嶋平に至る。彼処まで調へて
路用のうちめて。梓の歎さる。あま。いつちと問を。ま門ハ
情と。今ハ何ぞ包まや。某其度ハ武藏の国川越。あま成
長名を。杉谷ま門と喚ぶ。夫より如此。這般と。白浪寺での

一任一付まこと程ヶ谷の危難まで逸々委しく告ぐは杉戸の十郎
横子とありて。吾推察よ違ハざりたり。いざしく傷よ是足あは。あつハ
あまごも此家の處女亡父よりして此十郎は黄金と貸しといひこそ
不測彼が面持あつて悪きこととるはともいふは其のよひ委しく問ひ
あんと頼む處女とさく招けともく。汝いつなる者あ。吾は黄金と貸
たりと明々よいハ心ひれ佛家の説よ似とていふも。あまごも。あまごも。あまごも。あまごも。あまごも。
前世よあひく。吾は黄金と貸さるるんといふ言ふらば定るの証。此と
疾くいせよ。近きよ是と調へ。返くひきせんや。處女と問ひけら。あまごも。
洞ごも。妾ハ誠の人ゆき。さる盡物ハ信らねど。三年以前よ。爺親が
辞せぬ其こと。は。挖方近く。吾倚と招け。這回病ハの重く。い。方に

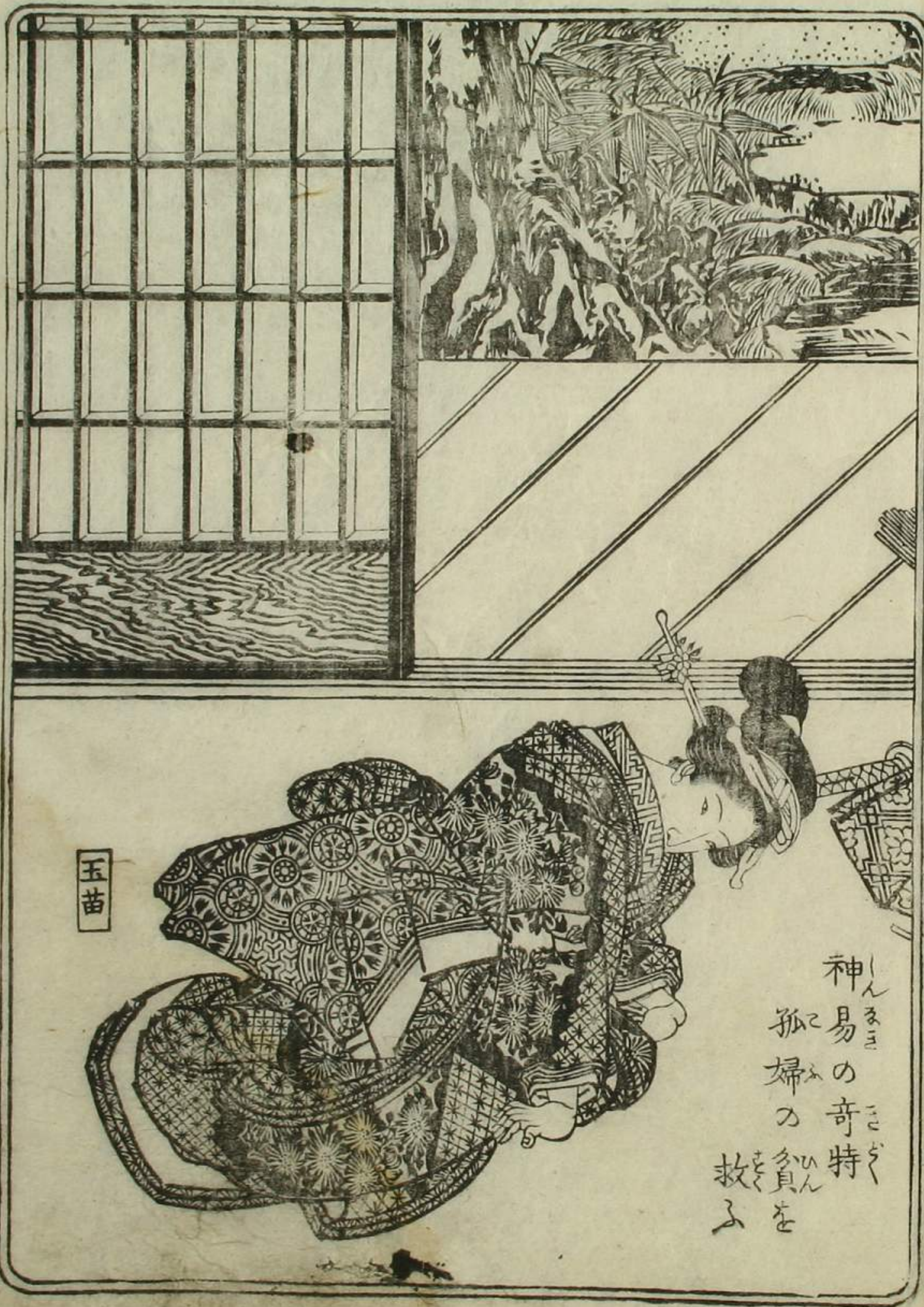
一ツも佐り難く。母ハ先頃辞せ。吾もこせよ。あ人さるら。まご年
ゆらぬ此と持く。如何よあらんと。学ん東多。黄泉の障。是のさる。されど
下僕。の豆助が。年来。信実。内外の度。と物さる。今より後
ハ彼とのく。父子も。此ハ。亡跡の。當り。せよ。佛吾救。年心。あまごも。
貯へ。あたる。黄金。あまごも。牙の上。知ら。陰陽師。と。諭ふ。い。今。今。
死ぶ。も。あ。い。ね。親。き。人。は。貸。あ。と。と。と。国。と。隔。く。度。あ。ま。今。今。
是。と。遺。る。に。う。あ。情。あ。い。此。人。ハ。世。も。尊。を。武。士。は。在。せ。吾。亡。後
あ。彼。金。と。必。ら。ど。返。つ。め。其。黄。金。と。い。ふ。あ。ら。は。此。家。と。忽。地
人。は。譲。了。黄。金。と。合。く。田。地。と。さ。め。春。ハ。耕。く。秋。耘。く。さ。ら。に。名
利。は。繫。が。さ。ま。長。生。と。樂。べ。く。さ。ら。と。黄。金。と。い。ふ。ま。で。い。は。い。り。二。年。と

間患難せしに此れど和君が逗留の頃ハ年月の半あり。従者も亦
来ませしハ全く相違あらざり。斯ハ言せしものありし若し
るたるらば妾が麻忽あの上あらざり。情と以て此の罪と許し
解ふるん。十郎始終よく又き其の所と速く眼をむらた處女と
こそ。聊吾身よ學久ハあらねど言葉の中ハ陰陽師此の上知らざり
らる。其の方が父ハおひら。まこ相法とよく志ありやと回
は。爺親平生よ易と好きて障ある時ハ書物と視筮めて吉凶禍福と
測る小大く中なるよう。近き邊の人々皆グ。律ハ觸てハ吾家よま
占めと密められたと回答よ。且バ十郎が忽地破とを拍く。吾不幸
に。其の方の父が存生のうち見ざる遺憾最や。誠よ易の

聖みこそ先見の智の著れた可憐崎人と田野の裡に埋ま
し。し。其金返しひきかへん。暫く待ねと回答て頓く行李引
算本筮竹より出せ。妾門と始り。従者皆ハ其意と弁せ。こ
不測の事ありと戸を守り。對居る。十郎ハ香と焚。要時眼と塞ぎ。何
から兄文と唱へ。筮。終りて家の内と信と。又。偶る。柱
は指とさ。吾借る金五百兩。ある柱の本あり。頓く掘起して稟
後と。い。處女ハ胸。吾家よ埋あるものと和君よ貸し。亡父の言
お。是ハ。同。十郎さ。父が野へ
五百兩。宗。其方ハ幼年。此家と後見る。故よ。其の
ま。忽地人の物とある。故よ。柱の本よ埋められたるもの

ること。そと明々地よりの時ハ黄金とそのみ渡さす似たり。言わば更よ
 知るまじうき。己は時とれを好きて物の用少くされどむむりの度
 とす。吾今たふ来るるものと三年さたよるなり。まういひ遺す物
 むのり。嗟感むく此人や。嗟讚むく此人や。頻りに稱讚して止む
 集會一人も現ふ如きこと。よ物も其黄金と。元と元バのまじ信用
 世に。其詞と感むるもの。十郎下僕ふ命たり。此処る老僕豆助ふ
 物致るごととより出させ床と離して柱の元三尺まき。堪らふ果し
 一の物あり。是もあふと被さ出せ。方尺なるりの管より。その重
 まる十斤あまり。上にも何から文字あまど土中埋て讀むむこと。は
 即とことらち毀爛きて。是れが十郎が詞。差むと五百兩輝く。くも

及ぶる中に。自筆と添へ一札あり。そのあづこ色バ女児玉苗志ご
 幼年するるとり。昔三年と往く。讀むと今十郎が察す。うら
 詞ふ一頁も差むわが。入る音意のまひとる。中にも處女王苗ハ斯ま知
 らで。只後よ返りて。女とあひ惜む。まへぬ。うら。今さら
 不面うて後悔。さあに勸解するん。十郎完尔とち笑ふ。心糸心に
 かへまら。父が今盤の詞を守り。豆助漢子と偶々。患苦と忍びく。その
 家と人よ渡され。気健さ。雄子も及ぶ。差動る。此上も爺市。遺
 言守りて。田畑の地と。さる。豆助とち主人の女児幼推る。信書よ
 冊より。神妙る。所の長小も。語らひて。程よく量つ。ゆへと。いふ。お
 論より。五出ん。うら。時玉苗其處へ走る。いを。加君が詞と。は。路



玉苗

神易の奇特
 孤婦の貧乏を
 救ふ



杉戸十郎

竹

扶持する言と嫌ふに似げり。大勢一回は有りしと感ずるも言
 一く。吾も時々の一美あり。夫丈量を難し。何れ免れも此野
 五三月ハ逗留せんと願く。母門と引合せ。茂平ハ従者よ。支度おたつ。妻
 門と両個ハ奥の亭にて暫く甜ふ其うちに酒殺と自ら塩排し。春
 齋し。まづ遠来の情と述べ。暫く酒をさへ。其夜ハ卧房へいらに
 たり。かくて次の日。至り。左馬次ハ十郎と昨日の工。大に教待。其後
 一間より招た。汝も時む。一件ハ尋常の言。あらわ。漫。齒。り
 漏く難し。然りと。と。吾と。你ハ。既ハ。叔姪の。因あり。喻へ。つ。あ。言。あ。ん
 せ。包。も。隠。さ。ん。か。ら。る。ま。く。語。る。ま。も。你。も。と。話。ひ。も。律。と。果。は
 め。い。ま。ま。や。田。答。と。答。く。言。べ。さ。る。り。と。詰。ら。ま。ま。十。郎。が。此。身。よ。ま。ら。ん

言ふあるら。何と。吾も。言。さ。ま。ま。さ。る。干。隔。の。恥。も。あ。る。ま。ら。ん
 る。い。ま。ま。や。妻。の。お。ら。ま。ま。と。ま。ま。く。完。尔。自。ら。う。ら。ん。り。語。お。の。易。に。言。ら。ん
 ま。づ。拭。よ。回。て。ま。ん。丸。そ。人。倫。の。親。と。と。い。を。父。子。の。間。に。増。の。り。の。り
 父子と除くと。た。叔姪。の。姪。を。似。て。ハ。曲。礼。の。猶。子。の。下。と。い。ふ。ま
 ら。ん。や。姪。と。い。ふ。と。子。の。如。く。ら。叔。父。と。い。ふ。度。父。の。下。と。い。ふ。你。が。い。た
 博識。の。か。い。と。義。之。東。坡。の。筆。と。授。る。類。は。似。と。い。ふ。と。あ。ま。ま。こ。心。と
 せん。と。い。ふ。此。理。は。差。あり。や。を。ま。づ。回。答。て。ま。ん。と。底。意。ハ。お。ら。れ
 叔父が詞十郎。あ。て。ら。ら。る。う。笑。え。こ。の。以。て。及。ぶ。べ。た。命。さ。る。妙。な。よ
 ゆ。る。り。ま。ま。某。ハ。尋。常。の。人。と。差。ひ。く。父。母。の。辞。世。て。く。り。茂。平。于。鵲。思。存
 稟。ゆ。り。の。る。ら。違。背。と。仕。ま。ら。ん。と。笑。より。忽。地。満。面。の。笑。と。合。て。ま。ま

こそあま。美気遣りたはるれ。吾も其れ。今戦国の風俗
あり。父子仇敵とせしむるは。一國のわづらひ。努力人ふる備へる。
外のこころあらねば。侮れむ。吾家の救代此地は。居をあらく。其れを
知らね。老さる。然るに上列万座山の麓。一個の校舎あり。自ら上野万座
太郎と號し。逆威と震ひ。既官府にあり。吾支配する郷中と
する。万座太郎が物あるさんと。粗その風説。頻り。固より。徳一。勝
知縣賄賂。多く。貪り。渠が。願ひ。任さる。い。其れ。成。就
る。救代。継ぐ。吾家の美名。勿心。地。わち。其威勢。渠は
敵。難。家の衰微の基。よ。ある。渠と討。此。地。を。壞。ひ
淨めんと欲。渠は。人夫と。養ひ。威勢。國司の如く。

ある。輒く。圖る。べき。傍。侍。近。山。一。万。座。山
ゆく。獸と。狩。んと。準備の最中。と。彼山。頗る。廣大。一日
に。狩。ハ。尽。す。仮。家。と。補。理。居。らん。ハ。必。定。その。上。處。を。討
果。え。と。豫。巧。め。る。時。ハ。禍。忽。地。の
此。に。お。よ。ぶ。心。煩。く。人。を。討。果。え。ん。如。く。そ。を。命
住。ま。り。く。吾。も。圖。り。果。え。ん。や。然。ら。ば。吾。も。汝。と。り。厚。く。賞。ん
つ。と。と。勝。つ。つ。眉。うち。頻。り。語。り。十。郎。自。ら。と。醒。く。其。れ。共
受。入。ぬ。君。子。ハ。く。其。独。を。慎。む。渠。正。しく。賄。賂。と。り。君。グ。又
配。と。把。ん。と。る。渠。は。於。て。邪。る。り。た。は。水。久。の。と。る。知。縣。賄。賂。と

合^{あは}つて各^{おのづか}あた^る君^{きみ}が支配^{あつか}と削^くら^るは、是^{こゝ}もま^まと邪^{よこしま}の、遠^{とほ}ら^るばして元^{もと}の如^{ごと}くふる。りてん^{てん}疑^ぎひま^るし。人^{ひと}も私^しありといひ共^{とも}皇^{すう}天^{てん}争^{まが}う善^{ぜん}悪^{あく}邪^{よこしま}正^{ただ}と照^あら^るてや在^あら^ずま^まの^{きん}君^み渠^をと人^{ひと}をらむ思^{おも}ひ^まる^る其^{その}罪^{つみ}ある^る。此^{こゝ}と要^よま^まふ至^{いた}ら^ずん某^{たがひ}野^の渠^をよ億^{いっ}々^{びん}。止^とり言^{こと}を^まら^るれど。此^{こゝ}夏^{なつ}の^ま住^{すま}り住^{すま}り。君^{きみ}が職^{しやく}を^とと教^{しやく}の^と人^{ひと}よさ^すと^ま外^{ほか}に^た侍^{しやく}の^まも^も其^{その}欺^{あや}む^ま夏^{なつ}ハ^ま惚^{おぼ}ふ^まま^まと^ま言^{こと}せ^まれ^ま敢^あず^ま礮^{たう}と白^{しろ}眼^{がん}口^{くち}怜^{あは}れ^れもの^{もの}物^{もの}々^々己^{おの}こ^ごに^まま^ま此^{こゝ}と^ま侍^{しやく}の^ま人^{ひと}欺^{あや}む^ま夏^{なつ}ふる^まら^るむ^ま何^{なに}の^ま思^{おも}ひ^まの^ま悪^{あく}も^もと^ま知^ち行^{ぎやう}と没^{ぼつ}収^{しゆ}せ^らら^るま^まぞ^ま薄^{うす}老^{らう}の^まよ^ま其^{その}罪^{つみ}あ^らで^ま配^{はい}好^{こう}の^ま月^{げつ}と^まこ^こる^まこ^この^まい^まま^ま推^{おし}き^ま時^{とき}よ^ま父^{ちち}と^ま妻^{つま}の^ま死^しる^まと^ま朝^{あした}夕^{ゆふ}の^ま吾^{われ}子^この^ま如^{ごと}く慈^{あま}れ^ま育^{そだ}て^まお^まび^まく^ま学^{がく}問^{もん}させ^ま物^{もの}学^{がく}ば^らて^ま人^{ひと}並^{なら}ぶ^ま物^{もの}ら^ま程^{ほど}の^ま推^{おし}る^ま

せ^まぞ今^{いま}も^まい^まま^まく^ま此^{こゝ}の^ま惚^{おぼ}ふ^ま夏^{なつ}ふる^まら^るま^ま背^{そむ}く^まべ^べと^ま言^{こと}は^まば^ま乾^から^るぬ^まく^ま諫^{いさ}め^ま侍^{しやく}の^ま人^{ひと}と^ま道^{みち}を^まん^まと^ま知^ち行^{ぎやう}の^ま離^りれ^ま心^{こゝろ}を^ま斯^{ごと}く^ま賤^{せん}く^まり^ま侍^{しやく}の^ま人^{ひと}と^ま道^{みち}を^まん^まと^ま知^ち行^{ぎやう}の^ま離^りれ^ま心^{こゝろ}を^ま斯^{ごと}く^ま其^{その}俣^{たがひ}の^ま拾^{しやく}ち^まま^ま一^{いっ}大^{たい}の^ま此^{こゝ}座^ざと^ま去^させ^まと^ま兩^{りゆう}段^{だん}と^まい^いふ^まま^ま好^{こう}と^ま左^さの^まい^いれ^まと^ま十^{じゅう}郎^{らう}の^ま能^よく^まな^ま百^{ひやく}足^{そく}の^ま虫^{むし}死^しま^まと^ま佐^さの^ま者^{もの}の^ま君^{きみ}ま^ま故^{こゝろ}に^ま體^{たい}倒^{たう}ま^まと^まい^いふ^まの^まの^まこ^こ半^{はん}臂^{へい}と^まも^もる^まべ^べた^まお^おん^んま^まと^ま害^{がい}心^{しん}と^ま懐^{わく}く^まべ^べい^まま^まと^ま此^{こゝ}夏^{なつ}を^ま送^{おく}ひ^まま^ま他^たの^ま人^{ひと}も^もる^ま渠^をは^まま^まく^ま威^い勢^{せい}ふ^ま替^かつ^まと^ま遠^{とほ}く^まら^まま^ま山^{さん}家^かと^まも^も滅^{めつ}た^まと^まん^まハ^ま眼^{がん}前^{ぜん}吾^{われ}の^ま五^ご十^{じゅう}の^ま今^{いま}も^ま及^{およ}む^まと^ま賊^{ぞく}の^ま等^ら一^{いっ}族^{ぞく}の^ま計^{けい}ら^らと^ま皺^{しわ}腹^{はら}切^きん^まハ^ま大^{たい}人^{じん}と^ま立^たち^まる^ま吾^{われ}の^ま先^{さき}へ^ま自^じ殺^{ころも}しく^ま夏^{なつ}月^{げつ}と^まい^いふ^まと^まお^おん^んま^ま君^{きみ}ハ^ま山^{さん}家^かに^ま住^{すま}り^まく^ま心^{こゝろ}の^ま随^ま意^いと^ま計^{けい}

